報　　告

ビアトリス・ポッターの1886年論文 The History of English Economics の原稿のトランスクリプションと解説（１）

佐藤公俊[1]

[1] 一般教育科―社会科（Liberal Arts-Social Scinece, Nagaoka National College of Technology）

THE SIGNIFICANCE AND TRANSCRIPTION OF BEATRICE POTTER'S MANUSCRIPT OF "THE HISTORY OF ENGLISH ECONOMICS", PART I

Kimioshi SATOH[1]

Abstract

This report introduces the transcription of manuscript of Beatrice Potter : "The History of English Economics" and the significance of it in English Economic thought. She researched the history of classical political economy in England from 18th century to 1880s and reviewed it in this manuscript.

This part I includes transcription of folios from 1 to 18 of her manuscript.

Key Words : *Beatrice Potter Webb, The History of English Economics, transcription, David Ricardo, Alfred Marshall*

１．解説

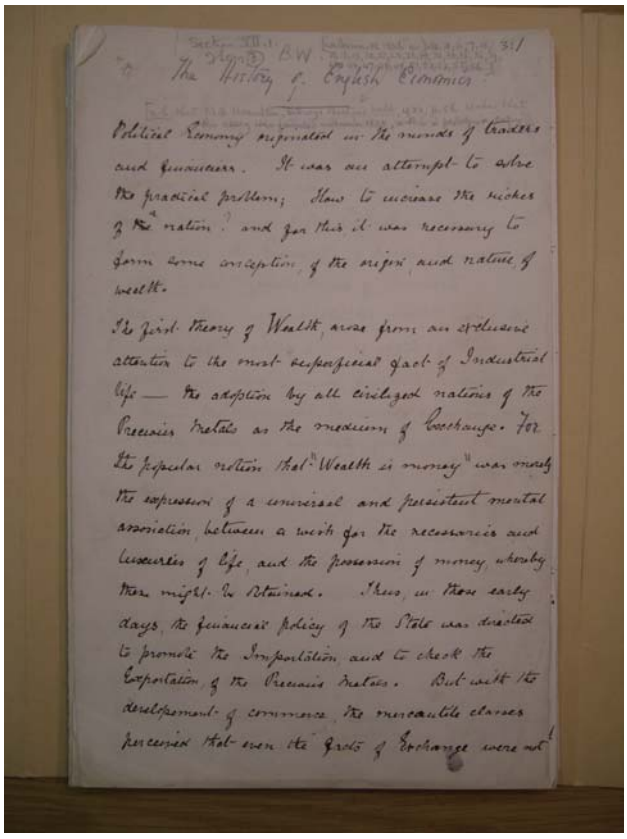
本稿ではビアトリス・ポッター・ウェッブ（1858-1943）の未公表論文「イギリス経済学の歴史」The History of English Economics[1)]（以下「歴史」論文と呼ぶ）の原稿のトランスクリプションを行って活字体英文（字体はBookman Old Style）で示し，論文の意義を明らかにする．トランスクリプションとは，手書き文字など読みづらい記号を活字体などで読みやすく書き写すことである．

１．１　ビアトリスの1886年草稿と清書

本稿でトランスクリプトした手書き原稿は，ウェッブ夫人として有名なビアトリス・ポッター・ウェッブが，結婚前のビアトリス・ポッター時代に経済学を研究し，イギリス経済学の歴史を1886年に自筆で記した草稿を，投稿用に清書させたものである．この原稿はThe History of English Economicsと題され，Passfield 7/1/3 MS folios 1-58[1)] と分類されて，ロンドン大学政治経済学院 LSE の図書館の文書庫にPassfield collection の一部として保存されている．

この原稿は，A4より少し小さく縦長の用紙に清書された後に，おそらくビアトリスにより読点等を加えられたもので，1枚に1行6～12語，20行前後で170

語ほど書かれた用紙 folio 58枚からなっている．1枚目から3:1，3:2等と順に番号が振ってある（以下ではFol.3:1， Fol.3:2等）．原稿の本文全体は清書されており，タイトルと末尾の署名と追加の読点等はビアトリスの手によるものであろう．清書であるが，以下の**写真－1**から分かるように文字が特殊な筆記体で書かれていて，一見では個々の単語が把握しづらい．広く研究に供するためには，まず文字が識別できるように活字体に置き換える必要がある．


The History of English Economics

Political Economy originated in the minds of traders and financiers. It was an attempt to solve the practical problem; How to increase the riches of the nation? and for this it was necessary to form some conception of the origin and nature of wealth.

The first theory of Wealth arose from an exclusive attention to the most superficial fact of Industrial life — the adoption by all civilized nations of the Precious Metals as the medium of Exchange. For the popular notion that "Wealth is money" was merely the expression of a universal and persistent mental association between a man's for the necessaries and luxuries of life, and the possession of money, whereby these might be obtained. Thus, in those early days, the financial policy of the State was directed to promote the Importation and to check the Exportation of the Precious Metals. But with the development of commerce, the mercantile classes perceived that even the profits of Exchange were not

写真－１　原稿の1枚目

１．２　「歴史」論文の紹介の意義

この未公表の「歴史」論文を紹介することの意義は、ビアトリスの進化論的な社会学的経済学の基礎となったアイディアを明確に提示することである．「歴史」論文にはそれに関して次のような注目すべき論点が含まれている．以下では研究者や彼女の他所の記述でこれらの論点，例えば①に関するものを挙げて検討した場合には近くに(①)と記しておく．

① リカードの抽象的演繹的経済学批判
② スミスの社会改革家としての評価
③ マーシャルの経済科学の方法の評価
④ ハーバート・スペンサーの評価と暗黙の批判
⑤ 新しい経済学の枠組みの提示
⑥ 経済的能力と経済的欲望との柔軟な関係
⑦ 社会生物学的方法や社会生理学･病理学の提起
⑧ 貧困という社会病理への治療法としての国家介入の評価，関連して救貧法の評価

この「歴史」論文の草稿を準備する少し前の時期にビアトリスは，自由党のリーダーであったチェンバレンとの恋の破局を迎えていた．ロイドン・ハリスンの言うように，彼女はその痛手から立ち直るために社会科学を猛勉強して，1886年にイギリス経済学説史についての「歴史」論文草稿を書き，そして1887年にはマルクスの『資本論』第１巻（エンゲルス編の英語版）の価値論批判の論文「カール・マルクスの経済理論」の草稿[2)]を書いたのである．これらは残念ながら，ビアトリス自身の手紙や配布した要約の悪筆，および，社会学の師匠のチャールズ・ブースが論文の完成度を疑問視したこと，また，学問の師であるスペンサーが彼女の国家介入主義（⑧）を批判したこと[3)]などの事情で当時は公表されなかった．後年これら二本は彼女によりまとめられて大幅に加筆され，自伝の第1部に当たる『私の修行時代』*My Appernticeship*[4)]に「経済科学の本性について」論文（以下「本性」論文と呼ぶ）[5)]として付録に収録されたのである．

ウェッブ夫妻は1920年代までには進化論的な社会学的経済学を確立していた．1926年までに執筆された「本性」論文では，彼女は政府や企業や家族など複数の生産様式の混合として社会を見て，家族生活の領域や福祉経済の領域，および他の社会経済諸領域を捉え，その検討に歴史的方法，社会有機体的方法，社会制度的方法と社会生理学的・病理学的方法を適用する．彼女はこのような領域と方法を結合させ，諸生産様式の複合という新たな社会システムのアイディアを示して，社会進化論とも合わせて画期的な社会経済理論を提起したと評価できるのである．

ビアトリスの理論体系の「本質的な独創性」[2)] と先駆性を把握してゆくためには，この「本性」論文と「歴史」論文と比較して，相違と両者間の発展関係を把握し，熟年期と初期のビアトリスの社会学的経済学の特徴と推移を把握することが必須である．この「独創性」の基礎とそれへの着目の時期の確定のために「歴史」論文とその準備過程を検討する必要がある．1886-1887年の彼女の初期の経済科学研究での，スミス，リカード，マーシャル，及びハーバート・スペンサーの学説的位置付けや，社会学的経済学の方法，対象，特徴を検討して，その時期に彼女がどこまで熟年期の進化論的な社会学的経済学

に迫ったかが問題である．そして，この時期に彼女のこうした方向性とアイディアが認められれば，それは夫シドニーと独立で画期的かつ先駆的なことなのである．ただトランスクリプションの紹介を主旨とする本稿では，ビアトリスの1886年前後の経済学研究に深く立ち入らず，先行研究に触れておくに留める．「歴史」論文の翻訳とこれらの問題，ビアトリスの経済思想の発展におけるその位置付けの問題とは，稿を改めて検討する予定である．

１．３　マクブライアーによる先駆性の評価

A.M.McBriar は*Fabian Socialism and English Politics 1884-1918*[6] で次のように書き，フェビアンの方法と見解が歴史主義に変わったことへの，ビアトリス・ポッターの「歴史的方法」の先駆性と彼女の「歴史」論文の演繹法批判の独自性を強調する（①）．

「フェビアンの見解の変化は単に歴史を研究した結果ではなかった．それは，経済学者がそれまでに彼らの抽象的演繹モデルのタームで論じてきた諸問題に，歴史的方法を特別に用いたことの帰結であった．フェビアンの中でもこの方法の先駆者はビアトリス・ウェッブであった．

すでに1886年と1887年に，フェビアン協会のリーダーたちの誰にも出会わないうちに，（当時の名がそうであった）ビアトリス・ポッターは経済学を研究してきて，権威ある経済学者たちの抽象的かつ演繹的方法に次第に大きくなる不満を募らせてきていた．」[6]

１．４　ロイドン・ハリスンの描く「彼女の成果」

ロイドン・ハリスンはビアトリスを経済学の勉強に向けたのはチェンバレンとの関係であるという。「1886年の夏、彼女は『経済科学』を把握しておくことが自分にとって必須であると判断するに至った。チェンバレンによる公共事業の提案に対する対応は、彼女の思考が荒っぽい政治経済学の理念と結論に導かれたものであることを、さらけ出した」からである．ハリスンはビアトリスの経済学研究により「彼女はそれに習熟するよりも、自分をそれから解放した」とし，その「成果」として彼女がスミスの「経済活動…を取り囲む人間生活」を把握し「歴史的感性」を身につけたとして次のように書く（②）．[7]

「彼女は経済学が道徳やよき政府の規範であるかのごとくに立ち現れたときにはそれがインチキであることに、感づくことができるようになった。…彼女は、師匠（コントのこと：引用者）に従ってアダム・スミスを例外とした。コントは彼を自分の偉人暦に加え、正当にも彼が道徳哲学者であり、道徳哲学を、彼の後継者がしたように隠れて不手際にではなく、公然とまた知的に展開したと見なしたのである。スミスは、経済人と呼ばれるような、矮小化され奇形化された人間性の概念に頼ることはなかった。経済活動を、それを取り囲む人間生活から抽象したりはしなかったのである。彼は歴史的感性を持っていた。ビアトリスのが自分に課した苦行は、これらの結論を再発見させ、彼女はそれが自分自身のものであるかのように感じることができた。」[7]

１．５　大前眞氏による「歴史」論文草稿の評価

大前眞氏は「歴史」論文でのスミス評価とリカード批判を重視する．氏はまず，ビアトリスによるスミス分業論の社会進化論的評価に注目する．

「そこではスミスは科学的研究者であると同時に社会改良家であったとされ，彼の分業論は前者を，そして労働価値説は後者を代表するものと論ずる．すなわち，分業論においては，スミスは歴史研究を核として演繹と帰納の方法を駆使して真理に近付くという科学的研究の結果，後に生物界でチャールズ・ダーウィン Charles Darwin が，そして人間社会においてはハーバート・スペンサー等の社会進化論者が発見した『機能的進化 functional adaptation 』（機能適応：引用者）の理論にも合致する慧眼を発揮したが，彼の創始した労働価値説はリカードゥを経由して労働全収権説を生み出し，マルクスに受け継がれ，経済学に混乱をもたらしたとする．そして，労働のみを価値の源泉とする思考法を，スミスの労働者に対する同情，ないし博愛主義から発したものと見て、これを科学的態度に反するものと論じている．」[8]

しかしビアトリスは，社会改良家としてのスミスを高く評価した．「スミスの議論には，ベアトリスの言う『病理学 pathological 』…が認められた」[8]からである（①，④，⑦，⑧）．大前氏は，スミスの「経済の歪みを正そうとする政策的提言」を彼女が高く評価したことを次のように言う．

「すなわち，スミスが重商主義的規制に反対して『自由放任 laisser-faire 』を鼓吹しながら，『国家による義務教育制度を是認し…対（ママ）には国家が使用者と労働者の関係に干渉するときに，『労働者の側に立つ』であれば，その干渉は常に『正しくまた公平である』と論じた』ことを（ビアトリスは：引用者）高く評価する」[8]

リカードの「定常状態」の議論では「一定の人口が与えられれば，経済的能力 Economic Facultyと経

済的欲望Economic Desireは，質的にも量的にも固定される」[8]とされたため，彼の政治経済学が実業の科学 Science of Businessとなったと，「歴史」論文でビアトリスは批判している．それを受けて大前氏は，彼女の経済的な能力と欲望の関係とその変動性を強調する観点を重視するのである．（①，⑥）．

１．６　『私の修行時代』における解説

ビアトリスは，先に触れたように『私の修業時代』の本文で，1886年と1887年の２本の論文草稿[1)2)]の執筆と，経済学研究について解説している．彼女は，「すぐに公表することを意図し」た，「社会診断についてのエッセイは書か」なかったけれども，「1886年の夏の月の間に…アダム・スミスからカール・マルクス，カール・マルクスからアルフレッド・マーシャルという，政治経済学者達の著述の研究から生じる一連の思考を，経済学の社会学との関係についての観念を，首尾一貫した価値論を，発展させる方向に転じ」[4]て，二つのエッセイを書いた．

「1886年の夏と秋の間ずっと私が夢中になっていた『私自身の小さなこと』は，二つの長いエッセイとなった．一つは『イギリス経済学の歴史』についてのものであり，他の一つは『カール・マルクスの経済理論』についてのものである―どちらも今まで公表されなかった．」[4]

ビアトリスは「政治経済学者達の著述の研究から生じる一連の思考」と「経済学の社会学との関係についての観念を」を発展させて「イギリス経済学の歴史」論文を書き，翌年「首尾一貫した価値論を，発展させる方向」でマルクス価値論を批判する「カール・マルクスの経済理論」論文を書いたのである[4]．

ビアトリスはこの2本の論文は当時自分が研究で夢中になっていた「私自身の小さなこと」が形をとったものと述べて大切に扱うが，自己評価は低い．

「これらのエッセイの中に何か本質的な独創性がある，とは私は思わない．むしろ当然にも，その真理の粒は認められた政治経済学者の本に見られるようなものである一方で，その全ての誤りは他の変わり者の著作の中に見いだされるものであるのだ．私が言いたいことはせいぜい，これらのエッセイに体現されたアイディアは事実私自身の心から生じたということだ．」[4]

彼女は「これらのエッセイの中に何か本質的な独創性がある，とは私は思わない」と謙遜しているが，実際には，この本文の付録として1926年までに書かれた「本性」論文では，彼女の社会学的経済学の方法と対象についての鋭い指摘がみられ，進化論的社会学的経済学が提示されたことは，先に述べた．

筆者はこの付録の「本性」論文が「本質的な独創性」のあるものと考えて，「本性」論文の紹介と翻訳を発表し[9]，その内容を論じてきた[10]のである．

１．７　1886年の日記に見る草稿執筆時の心境

ビアトリスが公式記録のように付けてきた日記から「歴史」論文草稿執筆時の彼女の心境を見よう．

1886年7月2日，ビアトリスは政治経済学研究について嘆きと成果を記している．彼女は，ぼんやり「野心的アイディア」を夢見て「政治経済学は嫌なものだ―もっとも嫌な骨折り仕事だ」が，古典派政治経済学批判のためには「私がそれに…そして更に，私がその基礎に習熟しなければならない」という．それはつまり，「政治経済学の基礎となっているデータが実は何か，それが必要とする仮定は何か，その推論と結論が覆う領域は何か」捉えなければならないというように，批判対象の理解が必要だからである．自分の「野心的アイディア」に基づき，彼女が「欲する形態は，大量の演繹的推論と例証的事実とからは想像もつかぬものである」（①）．[11]

1886年7月11日の日記が書かれたページに，ビアトリスはアダム・スミスの『国富論』（1776）についてのノートを挿んでいる．[11]この時期に『国富論』を読みこなし，スミスの議論を位置付けたのであろう（②）．その後決定的な展開が訪れる．

1886年7月18日ビアトリスは，「私は，望む限りに，経済科学の背骨を叩き折ってしまった…政治経済学の原理は，今まで確固たるものとなったことがなかった―その原理は，新たな問題が観察されるにつれ，その数が増えてきたばかりか，それらの原理自体は，すでに一般化されてきた各部門の主題についての観察により大なる注意を払って発展してきたのである」と言って，「政治経済学の原理」を把握して批判しきったと確信するのであった（①）．[11]

それから3週間ほどして，8月8日にはビアトリスは「イギリス経済学の歴史」の草稿を書き上げた．

ビアトリスは，「『イギリス経済学の進歩』の第一部を仕上げ」たあとで，それと第二部のテーマを次のように示している．「この第一部は，この科学の起源と，アダム・スミスにおける科学的探求者と社会改革者という二重性としてのその表現とを扱っている．」そして，「第二部」は次のような問題で始まる予定である．「少数による階級的圧政と抑圧とに対する18世紀のこの熱烈な改革運動が，如何に

して，19世紀の雇用者の福音を代表する一科学に転化されたのか」と言う問題である（②）．[11] ただし，「第二部」のこうした問題の検討も「歴史」論文に含まれることになったのである．

「歴史」論文の公表について，ブースやスペンサーから賛成が得らなかたビアトリスは，同年9月18日「私のアイディアは真のものと，またいつの日か，私によってでなければそのときは私よりもずっと適任の他の人々によって，仕上げられるであろうと考える．私の論文の歴史的部分はできが良くて重要な部分であり，そして私にとって全体での失敗は歴史的で重要な部分と構成との結び付きのぎこちなさである」と「歴史」論文の「全体での失敗」を嘆いている．「もし君が拒絶されて帰ってくれば―よろしい，君よりも優れた多くのものが同じ憂き目にあってきたのだ」と「君」＝自分の分身を慰めている．[11]

彼女は「小さなもの」の「アイディアは真のもの」と確信しているが，この「アイディア」は何であろうか．12 月 20 日にはビアトリスは，気を取り直して，社会科学と経済科学の対象ないし領域についてなど「歴史」論文の主要な論点を把握したといえる．まず，「経済科学の適切な主題が人間の本質であることの論証」，すなわち「社会科学が」「結びついている人間」の「社会生活の中で生み出される身体的な諸力―能力と欲望」を扱うのであるから，「経済学は，何らかの特別な結合力を扱いつつ，この科学の一部門でなければならない」のである．それゆえ，「経済学が交換価値を持つ能力と欲望とを伴うのを，示さなければならない」のである．これらの主張が先の「アイディア」の展開をなすと考えられる。それは，後々展開されるビアトリスの理論展開のモチーフとなる重要な社会学的経済学の観点を示すものである（⑤，⑥）．[11]

次にビアトリスは、「アナロジーに生理学を用いて」、「経済学者たち（が）…彼らの科学の主題を富と定義してきたかを示」す．「アダム・スミスにおける真実の光の爆発、リカードにおける虚偽の結晶化、そして、正統派経済学者達の想定する人間、カール・マルクスにおける抽象的人間とその来るべき運命、現代の経済学者たちによるその人間の復権という奇妙な存在の発展」という、社会病理学的観点による把握である（①，②，③，⑦）．[11] また，8 月の「イギリス経済学の進歩」というタイトルは，9 月には「…生成と成長」となって，進歩論から生成／成長論と生理学的になり，その後「歴史」となった．経済学の変化をスペンサーやラマルク的な進歩主義からダーウィン的な非定向進化主義や歴史主義と見る観点を形成していったのである．マルクス批判の展開は 1887 年になってから草稿化された．

ビアトリスはその後で，自分の議論の課題を提示する．「私自身の理論…の実際的な有用さを証明しなければならない。」つまり，「経済問題をその言葉で述べて、その意味を定義しなければならない」，「経済的な病理の注意深い観察の重要性を示しなさい。その例証として 1834 年の青書[Blue Book 英国の国会または政府の報告書]を，また，全ての工場法を使いなさい」と言う．また，「自由放任と国家援助の問題を述べなさい．一方でのこの生産と他方での窮乏との謎を自分でやってみなさい」と問題を示す．それは，自分の病理学的理論の観点から，「経済問題」，つまり社会の「経済的な病理」が「自由放任」によりもたらされ，その治療のためには「国家援助」・介入が必要なことを提起するのである（⑤，⑧）．[11]

２．原稿の注意書きとトランスクリプション

２．１　原稿1枚目の注意書きについて

下に掲載した**写真－ 2**に見られるように，原稿の1枚目3:1の上部にはビアトリスの手になると思われるThe History of English Economics のタイトルがあり，その上と下に鉛筆書きで、古文書館側の説明が書かれている．以下それらを上から順に示す．

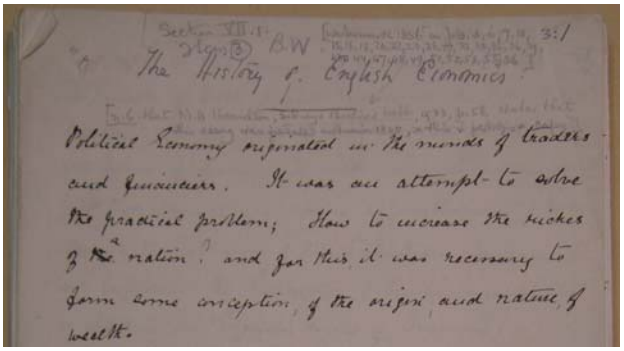


写真-2　原稿の1枚目の上部の注意書き

Section VII.1. Hem ③ B.W, [watermark 1886 at fols. 3,6,7,10,15,16,18,20,22,23,26,27,32,33,35,36,39,43,44, 47,48,49,51,52,53,55,56]　3:1

The History of English Economics

[n.b. that M.A. Hamilton, Sidney & Beatrice Webb, 1933, p.56, states that this essay was finished 1885, so this is perhaps a copy]

上のwatermark 1886のところから下のBeatrice に向けて矢印が書かれている．これは上に書かれたすかし1886にかかわらず，下の注意書きのように M.A. Hamilton のSidney & Beatrice Webb, 1933 に従って，このエッセイが1885年に完成していて，この原稿は写しである，ということを注記していると思われる．しかし前掲の1886年8月8日の日記に第一部を仕上げたという記述があるので，それは「明らかな誤認であり，1886年成立の投書用清書原稿である」[8]．以下2回に分けて58葉のトランスクリプションを示す．

２．２　トランスクリプション（Fol.3:1～3:18）

Fol.3:1

The History of English Economics

Political Economy originated in the minds of traders and finaciers. It was an attempt to solve the practical problem; How to increase the riches of a nation, and for this it was necessary to form some conception, of the origin, and nature of wealth.

The first theory of Wealth, arose from an exclusive attention to the most superficial fact of industrial life – the adoption by all civilized nations of the Precious Metals as the medium of Exchange. For the popular notion that "Wealth is money" was merely the expression of a universal and persisitent mental association between a wish for the necessaries and luxuries of life, and the possession of money, whereby these might be obtained. Thus, in those early days, the financial policy of the State was directed to promote the Importation, and to check the Exportation of the Precious Metals. But with the development of commerce, the mercantile classes perceived that even the facts of Exchange were not

Fol.3:2

a simple as they seemed to be. The prohibition of the Exportation of Gold pressed heavily on the East India Merchants; and the facts of the new trade discloed the real nature of Gold and Silver as commodities, apart from their conventional nature as instruments of Exchange. Through the influence of the East India Company, the laws forbidding the Exportation of bullion were repealed in 1663 by the English House of Commons.

The theory that Money constituted Wealth was still dominant, but the action and re-action of trade were realized, and theorists and legislators allowed that the Precious Metals might be directly exported, in order that money might be indirectly imported.

An elaborate commercial policy called "The Mercantile System" was introduced. The aim of this policy, was to secure through trade restrictions and bounties, the Excess of the value of the Exports over that of the Imports. This excess would it was thought cause the indirect importation of money, and lead therefore to the accumulation of Wealth.

It would be a mistake however to think, that historically considered, any theory of national wealth was the earliest

Fol.3:3

or most important factor in deciding the commercial policy of the country. Close corporations of trademan, manufacturers, and traders, had, during the Middle Ages, dictated their terms to Princes and Ministers in need of money, and had imposed the "manufacturing System" on the trade of the country. Those who were supposed to understand trade, ie, individuals and societies engaged in it were listened to, as the best authorities on commercial matters.

The interest of the existing Producer leading directly to bounties and monopolies, to take on foreign manufactures, and to the restriction and orbitary settlement of labour, was held to be synonymous with the National interest. Thus, the "Manufacturing" and the "Mercantile" systems, blenden naturally together. A plausible theory of national advantage, was a convenient cloak to private interest, against the inroads of new and conflicting enterprise.

From time to time, shrewd merchants and farseeing financiers pointed out the fallacy underlying the hypothesis, that the laws of

Fol.3:4

Production were favourably influenced by manipulating Exchange. The French Physiocrates broke through the crust of Exchange, and discovered one of the ultimate sources of wealth the "produce of Land." They installed "Matter" as the fetish of production, and advocated the useful principle of free-trade; but as the "Agricultural system" had little influence on English Public Opinion

beyond stimulating inquiry, it is unnecessary to consider it's theories.

In 1776, the year of the publication of Adam Smith's Wealth of Nations, though the "Mercantile" and "Manufacturing" Systems were discredited in the minds of the more philosophical of the trading class, these systems controlled popular opinion and decided the commercial and financial policy of the country. The material interest of the great mass of consumers, the industrial instinct of young enterprise, and the growing need for freedom of action among the workers, needed expression.

All alike found their expression in the independent inquiry of the great economist of the 18th century into the actual sources of National Wealth.

Fol.3:5

The great work of Adam Smith had therefore a twofold character. He aimed of the discovery of the laws regulating Production, with the practical purpose of increasing the total wealth of the nation; and with this object constantly in view, he investigated industrial life and traced to it's human source the the industrial product Wealth.

As a reformer of social abuse, he pleaded the material interests of the great mass of his country men; he pressed on public Opinion the ever extending and ever varying needs of the growing body of consumers -- he advocated freedom of action for the world be inventor, producer, and worker, and he denounced sternly, the weighting and shackling of the great majority in the race of life, through the state protection of individuals and small societies. This double nature gave to his work richness of thought and feeling; it endowed it with humanity, made it live and germinate in the hearts, as well as in the intellects, of his fellow – countryman.

On the other hand it resulted in an absence of logical

Fol.3:6

sequence, in an indefiniteness of purpose leading to serious misunderstanding among his followers. They confused the results of his investigations, which belong to all time, with the doctorines of his reformation, which applied only to the social conditons in which he lived.

Professor Marshall has thus described Adam Smith's achievement as a scientific investigator; "His chief work was to indicate the manner in which value measures human motive. Possibly the full drift of what he was doing was not seen by himself; certainly it was not perceived by many of his followers, who approached Economics from the point of view of business rather than philosophy. But for all that best economic work which came after the Wealth of Nations is distinguished from that which went before, by a clearler insight into the balancing and weighing by means of money, of the desire for the possession of a thing on the one hand, and on the other, all the various efforts and self-denials which directly and indirectly contribute towards making it."

Fol.3:7

Adam Smith, then in following wealth to one of it's sources "Labour"discovered the Economic nature of man, and described it. We mean by the "Economic nature that portion of human Faculty and Desire which has an Exchange value; or to use Professor Marshall's formula, which can be " weighed and balanced by means of money." He divided the Economic nature of man into Economic Faculty and Economic Desire, or as he would have expressed it into the power of production and into the capacity for Consumption. In his world-famed essay on the "Division of Labour," he traces the historical growth of Economic Faculty, and discovers, in the self interested desire to "barter one commodity for another" the original source of its progressive development.

We perfects the theory of "functional adaptation," as it is shown in human life, and forestalls the biological statement of it. And it is in these chapters that we see most clearly his characteristics as a reasoner. He states the empirical law as it

Fol.3:8

is developed in history, and manifested in contemporary life. He relates it clothed in fact.

He then proceed to analyze these facts, and verifies the universal nature of this law, by a deduction from an ultimate law of human life.

For Adam Smith was no pedant in the use of method; he used the Historical, Inductive, and Deductive methods, as they respectively suited the nature of his subject matter; his special distinction lay in his

constant effort to give to each it's appropriate verification. The chapter entitled "That the Division of labour be limited to the extent of the market" deals more especially with Economic Desire.

He demonstrates that the development of Economic Faculty is dependant on the growth, both in strength and variety of form of Economic Desire.

He follows the action and re-action of Faculty and Desire, though he intricate labyrinth of Exchange with it's attendant circumstances the conventional use of the precious metals. Later on, he describes the origin and use of money, the appropriation

Fol.3:9

of land by individuals, and the accumulation of capital. He distinguishes between Productive and Unproductive Labour, or as we should prefer to express it between Fertile and Sterile Economic Faculty; and he notices an empirical law which we think has hardly received sufficient attention- for it partially describes though it does not explain a phenomenon of our larger towns, namely,… "Wherever capital predominates industry prevails, wherever revenue idleness."

Further he defines the limits of Economic Science, for he notices the inequalities produced in the measurement of Economic Faculty by the presence of the other qualities of human nature. We may think his enumeration of the "Five principle circumstances which make up for a small pecuniary gain in some employments and counterbalances a great one in others" insufficient and inadequate,

he overlooks the great pleasure derived from the free exercise of the higher intellectual and esthetic faculty raising these faculties out of the category of the Economic in as much as the owner

Fol.3:10

exercises them without regarad to their Exchange value, and in so far as they may not correspond to an Economic Desire in the Public Mind; may be independent of it for their development; and through it's indifference, may have no measurable Economic result. Nevertheless his definition of these circumstances was a dostinct recognition of the limit of his subject matter; a recognition deplorably absent in the more vulgar minded of his followers.

But in one respect his analysis of the Economic Faculty was lamentably deficient. We refer to the ambiguous use of the term "Labour." He nowhere defines this word.

Muccullock as editor of the Wealth of Nations, writes "It seems however that generally speaking he supposed it to mean the exertion made by human nature to bring about same desirable result."

Muccullock himself however, objects to this definition as too restricted, and would include

Fol.3:11

the action of machinery and animals, "because so far as the doctrines of Political Economy are concerned they are in all respects same."

This no doubt true, if limit Economic Science to the discovery, and the description, of the "Laws of Production." And, if Adam Smith had confined himself to this aim, a purpose to which he brought the enthusiasm of the scientific student, and the fervour of the philanthropist, the wide definition of the term Labour would have been correct. But possibly, he wished to complete his picture of industrialism; for he trades Wealth through with evident indifference, as it was distributed by the conventions and the necessities of his time along the class channels of social life.

Labour the sole human source of Production, comprehending the grand total of human effort, is suddenly reduced in it's signification, to it's most restricted sence, namely manual labour. To explain the inequalities of Distribution, Adam Smith laconically relates the rise of Private Property, and the accumulation of Capital.

Fol.3:12

The original state of things in which the labourer enjoyed the whole produce of his labour could not last beyond the first introduction of the appropriation of Land and the accumulation of stock. It was at an end therefore long before the most considerable improvements were made, in the productive power of Labour, and it would be to no purpose to trace further what might have been it's effect upon the recompence or wage of labour." This reference to necessity has a strange sound to the modern ear, delicately attend to the "natural right" of the manual class of producers!

His indifference however manifested here, as in his whole treatment of the "Labour question" was but one of the bad results of his double character as social reformer, and scientific investigator; for his social sympathies, roused by the artificial restrictions of his own time, were enlisted in the service of the consumer and the would-be producer, he was in fact their official pleader. And in his way, the bad effect of this intellectual fallacy, was inappreciable, for the strife between the different

Fol.3:13

classes of producers had not as yet arisen. Nevertheless it is this small grain of falsehood developed by the ignorance of his immediate followers, pruned and trimmed by the cutting logic of Ricardo's Mind, transplanted by the German critics of Political Economy that now overshadows us in the mighty tree of socalled scientific socialism. For if Manual labour be the only form of Economic Faculty, if capital be only "result of parsimony" then after deducing current interest on capital, and after allowing for risk and clerk's wages of supereintendence, the net produce has been earned by the labourer.

These two assumptions are however false. Capital does not originate entirely, or even principally, in the act of saving, which is simply superior self restraint in the gratification of the Economic Desire, or possibly the absence of this Desire. It originates in the presence of a specific form of brain-power, which whether we give it a high or low value, has a definite place in the hierarchy of Economic Faculties--and is variously manifested in the organizers of industry

Fol.3:14

in the originators of commercial enterprise, and in the money making instinct of the wholesale and retail traders. It is strange that Adam Smith should have completely overlooked these special forms of labour, for he mentions in treating of Production not only the Inventor but also the relations to production of the learned Professions.

Before we leave the greatest and most original work on Economic Science, we would point out what we conceive to be a misapprehension in the minds of his followers, and of his German critics, as to his supposed doctorines of free contract and non-interference. They have mistaken the qualified precepts of the social reformer, for the abstract theories of a scientific investigator. They have forgotten that Adam Smith lived in an age of class oppression and that the "Wealth of Nations" is a history work of social obuses.

We can hardly realize the social effect of the laws of Settlement, of the prohibition on the emigration of the artisan, of the cruel penalties attached to illegal occupations, of the endless vexation and loss resulting

Fol.3:15

from the regulation, and restriction, of interernal and foreign trade. And yet, in no single instance did he enunciate a general principle of "Laisser faire" or advocate an unlimited freedom of contract. Undoubtedly he had the faith of an energetic and upright nature in the worth of individual effort. He was a man inspire by deep religious feeling, and he saw in the vice of self-interested class regulation the great antagonist to the natural law of Divine Government:

But he approved of State compulsory education; he advocated state military training of the whole population; he suggested as an encouragement to science the state examination of these engaged in the liberal profession; and finally, he declared, that, when the state interfered between employer and workman in the workman's interest the interference was always "just and equitable."

We may dream that state action is always good. We may awear it is always bad. We may believe that a deeper research and more extended reasoning warrants us in describing the exact nature of its

Fol.3:16

limits—enables us to say "here and no further." Adam Smith however was wholly innocent of these abstract ideas. He had only one general principle regarding state action—If interest A be virtually the State, and if interest A be antagonistic to interest B, then any state regulation of the joint affairs of A and B will be disadvantageous to interest B.

A modest proportion. A proportion none of us will controvert until the coming of the millennium of Ethical evolution when the altruistic Sentiment will be the dominant force of social life.

・----------・

What then were the changes in events and ideas that transformed this crusade of the 18th century against the oppression of the Many by the Few, into the "Employer's Gospel" of the 19th century; and substituted, under the shelter of a common name, a set of abstract principle for the conduct of financial business, for the scientific observation of one aspect of human life, the Economic nature of man.

If we wish to gain an insight into this question, we must study the leading features of the era of Industrial Revolution (eloquently described by Arnold

Fol.3:17

Toynbee) that interevened between the publication of Adam Smith's "Wealth of Nations" (1776) and the publication in 1817 of the next great work on Economic Science Ricardo's "Principles of Political Economy."

During these years, the great mechanical inventions of the 18th century, were realized. They gave birth to a new people, a people rapidly increasing in numbers, and changing in character, as invention after invention, opened out fresh possibilities of accquiring wealth. Steam and machinery instituted a new system of Industrial life. The unit of production, ceased to be the master workman, owing his stock, half agriculturist, half manufacturer, employing the labour of his family and of a strictly limited number of apprentices, and selling his goods in a provincial market; it became the big capitalist producing for a distant market, dealing out raw material to a collection of individuals, each of whom had its work apportioned with the same regularity and definiteness as was manifested in the

Fol.3:18

movements of machinery superintended.

（未完、（２）に続く）

謝辞：本研究に平成22年度科学研究費補助金（「ビアトリス・ウェッブの福祉経済学とフェミニズム」（課題番号21530192））を受けたことを感謝します.

参考文献

1) Webb, B.: The History of English Economics, PASSFIELD Collection, 7/1/3,1886.
2) Webb, B.: The Economic Theory of Karl Marx, PASSFIELD Collection, 7/1/5,1887.
3) 佐藤公俊：ビアトリス・ポッターとハーバート・スペンサー，相澤・加藤・日山編著，危機の時代を観る，社会評論社，2010.
4) Webb, B.: *My Apprenticeship*, Longmans, Green and Co., New York,1926.
5) Webb, B. : On the Nature of Economic Science, ((1) My Objections to a Self-contained, Separate, Abstract Political Economy and (2) A Theory of Value), in Webb, B. *My Apprenticeship*, as Appendix D, pp.422-430.
6) McBriar, A.M.: *Fabian Socialism and English Politics 1884-1918*, Cambridge at The University Press, 1962.
7) ロイドン・ハリスン：ウェッブ夫妻の生涯と時代，ミネルヴァ書房，2005.
8) 大前眞：ベアトリス・ポッター(ウェッブ)と政治経済学，經濟學論叢,45(3),55-69,同志社大学経済学会，1994.
9) 佐藤公俊：ビアトリス・ポッター・ウェッブ「経済科学の本性について」の紹介と翻訳，長岡工業高等専門学校　研究紀要，第44巻，第1号，平成20年3月，2008.
10) 佐藤公俊：ビアトリス・ポッターの社会学的経済学の歴史的方法―生理学的方法から進化論的方法へ―，長岡工業高等専門学校　研究紀要，第45巻，第2号，平成21年11月，2009.
11) Webb, B.: *The Diary of Beatrice Webb, Volume one 1873-1892*, edited by Norman and Jeanne MacKenzie, Belknap Press, 1982.

（2010. 10. 1 受付）